

平成 24 年 8 月 31 日

記者会見のお知らせ

(2012 年日本育種学会第 122 回秋季大会における発表課題)

1. 発表日時：平成 24 年 9 月 10 日（月曜）14：00～15：00

（本記者発表に関わる記事の解禁は、9 月 10 日の発表後 17：00 からとさせていただきます）

2. 発表場所：東京大学弥生講堂アネックス・エンゼル研究棟講義室（別紙参照）

（東大農学部正門入って左 http://www.a.u-tokyo.ac.jp/yayoi/plan_annex.html）

3. 出席者

日本育種学会幹事長 熊丸 敏博

（九州大学・大学院農学研究院 附属遺伝子資源開発研究センター 教授）

日本育種学会庶務幹事 岩田 洋佳

（東京大学・大学院農学生命科学研究科 生産・環境生物学専攻 准教授）

4. 発表内容の紹介

育種学は作物の品種改良の技術基盤とその理論を追究する学問領域です。日本育種学会（会員数約 2,000 名）は、その育種学に関する研究および技術の進歩、研究者の交流と協力、および知識の普及をはかることを目的として活動しています。

本発表内容は 9 月 14 日（金曜）、15 日（土曜）に京都産業大学（京都府京都市）で行われる日本育種学会 2012 年秋季大会で発表予定のものです。合計 276 の講演課題の中から選定された 4 課題について発表させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

発表タイトル：

(1) 多器官大型化突然変異遺伝子の同定

(2) ハクサイ根こぶ病抵抗性遺伝子座 *CRa*

(3) 熱帯産野生イネのもつ多げつ性とその発育可塑性を導入した北海道に適応する多収系統の開発

(4) 資源作物エリアンサス (*Erianthus arundinaceus*) のバイオマス原料の生産増大に向けた育種戦略

※詳細は別紙をご参照ください。講演要旨集は当日配布いたします。

問い合わせ先：

岩田 洋佳（東京大学・大学院農学生命科学研究科 生産・環境生物学専攻 准教授）

電話：03-5841-5069

FAX：03-5841-5069

E-mail: aiwata@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp

2012年秋季 京都産業大学

9月13日 (木)	午後	幹事会 15:00-18:00 (15号館 1F 15102セミナー室)																					
9月14日 (金)	午前	第1会場 12号館 5F 12502教室	第2会場 12号館 4F 12402教室	第3会場 12号館 4F 12403教室	第4会場 3号館 4F 301教室	第5会場 3号館 4F 303教室	第6会場 12号館 3F 12303教室	第7会場 12号館 3F 12304教室															
		ゲノム解析・ DNAマーカー 101-108 10:00-12:00	ゲノム解析・ DNAマーカー 201-208 10:00-12:00	分子育種・ 網羅的解析 301-308 10:00-12:00	育種法・ データベース 401-407 10:00-11:45 遺伝資源・ 品種育成 408 11:45-12:00	発生 501-508 10:00-12:00	変異創成 601-603 10:00-10:45 品質成分・ 収量 604-608 10:45-12:00	変異創成 701-708 10:00-12:00															
	第54回シンポジウム (シンポジウム・ワークショップ) 13:15-17:30 ○シンポジウム 13:15-17:30 S01 エピミュータジェネシスと次世代育種への展開, 前川雅彦・金澤 章・堤 伸浩 [第1会場, 12号館 5F 12502教室] S02 ダイズ研究のすすめ, 石本政男・阿部 純 [第2会場, 12号館 4F 12402教室] S03 わが国におけるバイオマス資源作物の開発の現状と今後の展望, 山田敏彦 [第3会場, 12号館 4F 12403教室] ○ワークショップ 前半 13:15-15:15 後半 15:30-17:30 W01 細胞質雄性不稔/稔性回復に関わるイノベーション創出基礎的研究, 鳥山欽哉・山岸 博 W02 ミトコンドリアは従順なオルガネラか - 核・ミトコンドリア相互作用の背景 -, 久保友彦・寺地 徹 W03 地球温暖化により襲来するイネ虫害とウイルス病への抵抗性育種, 貴島祐治・安井 秀 W04 男女共同参画推進委員会特別企画 - 研究に携わり続ける道 -, 男女共同参画推進委員会・宍戸理恵子 W05 次世代の遺伝学と育種 (育種学と農学のこれからを考える 24、若手の会主催ワークショップ), 高橋 有・山内卓樹・角井宏行 W06 育種のための情報解析ツール使い倒し塾, 矢野健太郎・岩田洋佳 W07 種子形成シナリオの分子遺伝学, 伊藤純一 W08 育種学教育の現状と展望, 佐藤和広・福井希一 ＜ワークショップ タイムテーブル＞ <table><tr><td>会場 時間</td><td>第4会場 3号館 4F 301教室</td><td>第5会場 3号館 4F 303教室</td><td>第6会場 12号館 3F 12303教室</td><td>第7会場 12号館 3F 12304教室</td><td>3号館 4F 302教室</td></tr><tr><td>13:15-15:15</td><td rowspan="2">W06</td><td>W05</td><td>W08</td><td>W01</td><td>W03</td></tr><tr><td>15:30-17:30</td><td>W07</td><td>W04</td><td>W02</td><td>—</td></tr></table>							会場 時間	第4会場 3号館 4F 301教室	第5会場 3号館 4F 303教室	第6会場 12号館 3F 12303教室	第7会場 12号館 3F 12304教室	3号館 4F 302教室	13:15-15:15	W06	W05	W08	W01	W03	15:30-17:30	W07	W04	W02
会場 時間	第4会場 3号館 4F 301教室	第5会場 3号館 4F 303教室	第6会場 12号館 3F 12303教室	第7会場 12号館 3F 12304教室	3号館 4F 302教室																		
13:15-15:15	W06	W05	W08	W01	W03																		
15:30-17:30		W07	W04	W02	—																		
懇親会 18:00-20:00 (8号館 2F 学生食堂 キッチンみつばち)																							
9月15日 (土)	午前	ポスター発表 9:00-12:00 (神山ホール 3F 第1・第2セミナー室) 奇数番号 9:00-10:30 偶数番号 10:30-12:00																					
	午後	第1会場 12号館 5F 12502教室	第2会場 12号館 4F 12402教室	第3会場 12号館 4F 12403教室	第4会場 3号館 4F 301教室	第5会場 3号館 4F 303教室	第6会場 12号館 3F 12303教室	第7会場 12号館 3F 12304教室															
9月16日 (日)	午後	ゲノム解析・ DNAマーカー 109-120 13:00-16:00	ゲノム解析・ DNAマーカー 209-210 13:00-13:30 増殖・生殖 211-220 13:30-16:00	分子育種・ 網羅的解析 309-319 13:00-15:45	遺伝資源・ 品種育成 409-420 13:00-16:00	発生 509-520 13:00-16:00	品質成分・ 収量 609-617 13:00-15:15	抵抗性・耐性 709-721 13:00-16:15															
		市民公開シンポジウム 13:30-16:30 (神山ホール 3F 第1セミナー室) 『近畿地方における伝統野菜・特産作物の発達と食文化』 総合司会: 江頭宏昌 (山形大学農学部) 1. 「京都の台所を支える京野菜の数々」 上田 耕司 (かね松老舗) 2. 「スグキナが生み出す上賀茂の風景と文化」 山岸 博 (京都産業大学総合生命科学部) 3. 「なにわの伝統野菜 -発掘と生産振興-」 鈴木 敏征 ((地独)大阪府立環境農林水産総合研究所) 4. 「F ₁ 大和マナ品種の育成と普及方策」 浅尾 浩史 (奈良県農業総合センター) 5. 「近江地方の新しい特産作物」 坂寄 潮 ((有)フローラトゥエンティワン)																					

1. 発表タイトル：

多器官大型化突然変異遺伝子の同定

2. 発表者：

内藤 健¹・平野 久美¹・加賀 秋人¹・白澤 健太²・磯部 祥子²・友岡 憲彦¹
(1 農業生物資源研究所、2 かずさDNA研究所)

3. 発表概要：

今から20年以上前、アズキの仲間であるケツルアズキの中から、茎や葉など複数の器官が同時に大型化する突然変異体が見つかりました。さらに、この変異体からは、原品種の2倍の大きさの種子が収穫できました。

私たちは、この原因遺伝子を特定できれば、同じマメ科の作物であるアズキやダイズの大きさも2倍にできる可能性があると考え、5年前から研究を重ねてきました。まず、変異体と原品種を交雑して得られた子供から、さらに次の世代を展開してみると、普通の大きさの個体と、大型化した個体が3：1の比で分離しました。これは典型的なメンデルの遺伝法則に従うものであり、変異体の大型化は、たった一つの遺伝子が壊れたことによってもたらされたものであると考えられました。そこで私たちはさらに交雑を繰り返し、大型化の原因遺伝子の候補を4つの遺伝子まで絞り込みました。続いてこれら4つの遺伝子の塩基配列を解読し、そのうち1つの遺伝子でのみ、8塩基が欠失していることを見出しました。この遺伝子はアズキやダイズにも存在することが分かっているため、同じような変異を起こすことで、これまでの2倍の大粒アズキやダイズを育成できるのではないかと期待しています。

4. 発表内容：

ケツルアズキの多器官大型化突然変異体 (Multi-Organ Gigantism = MOG) は、茎や葉といった複数の器官が同時に大型化し、種子の大きさは通常の2倍になります。簡単な交配実験により、この MOG 変異はただ一つの遺伝子が機能を失うことによって引き起こされたと考えられ、これを MOG 遺伝子と名付けることにしました。続いて、ケツルアズキ MOG 変異体と、他の系統とを掛け合わせた交雑集団を作成し、さらに分子マーカーの技術を用いることにより、MOG 遺伝子がどの染色体のどの領域に存在するのかを絞り込んでいきました。

その結果、MOG 遺伝子は第 8 染色体の上端に存在している 4 つの遺伝子の何れかというところまで迫ることに成功しました。最後に私たちはこれら 4 遺伝子の全塩基配列を解読し、そのうち 1 つの遺伝子だけが MOG 変異体において 8 塩基を欠損していることを明らかにしました。モデル植物のシロイヌナズナを用いた研究によっても、この遺伝子が欠損すると植物体が巨大化することが既に明らかにされていることから、私たちはこの遺伝子が MOG 遺伝子であると断定しました。

今後の予定ですが、まずは人為的に突然変異を誘発したアズキの集団から MOG 遺伝子が機能を失ったものを選抜することにより、ダイズ（大豆）よりも大きなアズキ（小豆）を育成してみたいと考えています。

5. 発表雑誌：

なし

6. 注意事項：

特になし

7. 問合せ先：

独立行政法人 農業生物資源研究所 遺伝資源センター

内藤 健

〒305-8602 茨城県つくば市観音台 2-1-2

TEL: 029-838-7474

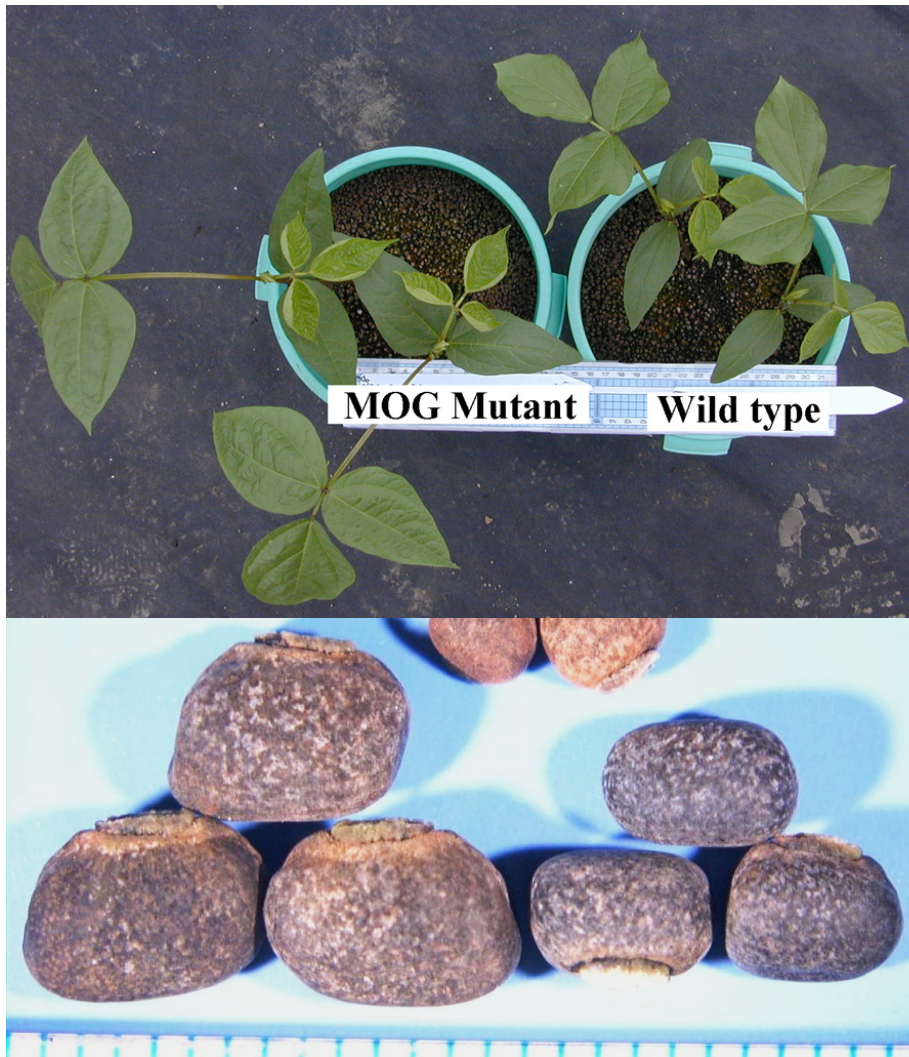
8. 用語解説：

分子マーカー技術

系統間におけるゲノム DNA の塩基配列の違いを基に作成した分子マーカーを目印とし、系育成の後代分離集団において、各個体の染色体構成を追跡することを可能にした技術です。

9. 添付資料：

多器官大型化突然変異体 (MOG 変異体) (左) と原品種 (右)



1. 発表タイトル：

「ハクサイ根こぶ病抵抗性遺伝子座 *CRa*」

2. 発表者：

上野 広樹¹，松本 悦夫²，有賀 大輔¹，北川 哲³，松村 英生⁴，林田 信明⁵
(¹ 信大院 総研科，² 長野野花試，³ 信大院 工研科，⁴ 信大遺伝子，⁵ 信大 応生系)

3. 発表概要：

ハクサイ (*Brassica rapa* L. ssp. *pekinensis*) の生産地では、根こぶ病による被害が大きな問題となっています。ハクサイに根こぶ病に対する抵抗性を与える遺伝子「根こぶ病抵抗性(CR)遺伝子」に連鎖する DNA マーカーについての研究は数多く行われてきましたが、CR 遺伝子そのものの実態はなかなか捉えられませんでした。今回我々の研究グループでは、強力な CR 遺伝子 *CRa* の単離に成功し、その塩基配列を初めて明らかにしました。これまでは DNA マーカーによって間接的にしか育種選抜が行えませんでした、この成果によって、直接 *CRa* を持つ品種系統を選抜し、新たな根こぶ病抵抗性品種を育成できるようになりました。さらに、本研究によって根こぶ病の発病メカニズムの解明に道が開けたので、根こぶ病により被害を受ける広範なアブラナ科作物の品種改良についても応用が期待されます。

4. 発表内容：

私たちは市販の根こぶ病抵抗性ハクサイ品種から見出された、単純優性の抵抗性遺伝子座を *CRa* (Clubroot Resistance locus a, 根こぶ病抵抗性遺伝子座 a) と名付け研究を行ってきました。この遺伝子座を持つハクサイは、根こぶ病菌系統 M85 に対して強力な抵抗性を示すことが分かっています。これまでの研究で、*CRa* 遺伝子座の有無を識別する DNA マーカーを開発してきましたが、*CRa* の遺伝子そのものを同定するには至っていませんでした。本発表では、初めて *CRa* 遺伝子の単離と塩基配列の決定に成功しましたので報告します。

CRa 遺伝子座を持つ根こぶ病抵抗性系統と罹病性系統を交配した後代の系統 (F_2 世代) を用い、アブラナ科植物のシロイヌナズナの DNA 情報を駆使して多数の *CRa* 遺伝子座近くの DNA マーカーを作成することで *CRa* 遺伝子が存在する DNA 領域を絞り込んで行きました。この解析の結果、抵抗性系統と罹病性系統で構造の異なる 1 つの遺伝子が *CRa* の候補として選ばれました。この遺伝子は TIR-NBS-LRR と呼ばれる構造を持つタンパク質をコードしており、抵抗性系統ではこの遺伝子が正常に発現しているのに対して、罹病性品種ではこの遺伝子に大きな別の DNA 断片が挿入されて発現していないことが明らかにな

りました。さらに抵抗性系統の *CRa* 遺伝子配列中に突然変異が生じると抵抗性が失われることも明らかにしました。これらの結果から、この遺伝子が根こぶ病抵抗性を決定する *CRa* 遺伝子であると結論づけました。

この *CRa* 遺伝子の塩基配列を目印にすれば、*CRa* による抵抗性を持つハクサイを苗の段階で確実に選抜することが可能になり、連鎖を利用する通常の DNA マーカーを用いた場合と比較して、根こぶ病抵抗性ハクサイ品種育成の効率を大幅に改善できます。

また、共同研究者の有賀らによって、*CRa* 遺伝子は多くの根こぶ病抵抗性ハクサイ市販品種で利用されていることが明らかとなりました（本学会で発表予定「P125」）。このことは、*CRa* が現在の根こぶ病抵抗性育種において主要な役割を果たしていることを示唆しており、本研究の意義の大きさを示すものでもあります。

さらに、抵抗性遺伝子の実体が明らかになった事で、その産物タンパク質の研究が可能となり、根こぶ病の発病あるいは抵抗性のメカニズムの解明に道が開けました。根こぶ病はハクサイ以外にもほぼ全てのアブラナ科作物に被害を及ぼす深刻な病気ですが、本研究で作成した DNA マーカーや *CRa* 遺伝子の情報、そして今後得られるであろう抵抗性の分子メカニズムの知見は、広範なアブラナ科作物の根こぶ病抵抗性品種の作出に大きく寄与するだろうと期待されます。

5. 発表雑誌：

準備中

6. 注意事項：

特になし

7. 問い合わせ先：

国立大学法人 信州大学 繊維学部 応用生物学系
林田信明

〒386-8567 長野県上田市常田

TEL 0268-21-5660 FAX 0268-21-5331

E-mail : nobuaki@shinshu-u.ac.jp

8. 用語解説：

根こぶ病：土壤中の微生物 *Plasmodiophora brassicae* によって引き起こされるアブラナ科作物に共通の土壌病害です。感染した植物体は根が肥大し、栄養分の

吸収が阻害され、著しい生育阻害が起こります。汚染された畑では、原因微生物が 10 年近く孢子の状態で残存するため、長期にわたって収穫に支障をきたします。ほぼ全世界的に見られ、日本だけでも 1 年間に 20 億円以上の農薬が防除のために使用され、作付されるハクサイの 5%以上で被害があると推定されています。

DNA マーカー：遺伝情報の載った連鎖地図上の特定の DNA 配列を利用した目印のことです。DNA マーカーを用いることで、特定の遺伝子が親から子へと受け継がれたかどうかを推測することができます。幼苗時に根こぶ病抵抗性遺伝子を持つであろう個体を選抜することができますが、これまでに開発された DNA マーカーは抵抗性遺伝子本体に作成したものではなかったため、一定の確率でエラーが起こっていました。

CRa：ヨーロッパ産のカブに由来する根こぶ病抵抗性遺伝子。長野県野菜花き試験場の松本らによって根こぶ病菌 M85 系統に対して抵抗性を示す遺伝子として倍化半数体系統 T136-8 を用いて見出された。信州大学繊維学部との共同研究により、これまでに有用な DNA マーカーが作出されてきた。

9. 添付資料：なし（記者発表当日に配布します）

1. 発表タイトル：

「熱帯産野生イネのもつ多げつ性とその発育可塑性を導入した北海道に適応する多収系統の開発」

2. 発表者：

清水 博之・伊藤 勇樹（農研機構 北海道農業研究センター）

3. 発表概要：

北海道は稲作のほぼ北限であり、低温により生育が抑制される場面は少なくありません。暖地や温暖地に比べて生育期間が短く、生育期間を通じて低温で、稲の生長量が少ない北海道では、特に初期の生育の停滞は収穫まで大きな影響が及ぶことになります。したがって、冷涼な地域で毎年安定した収量を得るためには、田植え後から生育を停滞させることなく、必要十分な数の茎（分げつ）を発生させて穂をつける性質が必要です。我々は、熱帯産野生イネの一種が、多くの分げつを発生させる能力をもつことに着目し、この性質を北海道の多収品種に取り込んだ系統を開発しました。栽培試験の結果、これらの系統は、生育初期からの茎数増加率が大きいだけでなく、植えられた稲株が占有できる空間（面積）に応じて茎数を増やす性質（可塑性）を備えていることがわかりました。今回開発した系統は、低温環境下の稲作における収量の安定化や栽培の低コスト化に役立つことが期待されます。

4. 発表内容：

北海道は稲作期間が短く、移植後の低温で生育が抑制されることがあるため、安定した収量性向上のためには、生育の早い時期に茎数を確保する特性が必要とされます。そこで、これまでに育種の母本として利用されることがなかった野生イネの多げつ性（分げつが多い特性）を積極的に利用することを計画しました。

まず、北海道在来型系統と熱帯産一年生野生種「W107」との交配による雑種系統の中から生育初期の茎数が多い系統を複数見いだしました。これらの系統に北海道の多収系統「北海飼 308 号」（後に品種名「きたあおば」として品種登録）を複数回交配した後、系統選抜と世代を進めることによる固定化を行い、複数の系統を開発しました。

田植え後にこれらの系統の茎数を定期的に調査したところ、どの系統も「きたあおば」を明らかに上回る茎数増加率を示しました。さらに、これらの系統は「きたあおば」と大差ない多収性を示しました。苗を植える間隔を変えた栽培試験を行ったところ、育成系統は、個体が占有できる空間に余裕があれば、

それに応じて茎数を増やすことができる能力（可塑性）が「きたあおば」より顕著に高いことがわかりました。野生イネ「W107」が茎数に関する可塑性をもつことはこれまでに報告されています。以上のことは、育成系統が、①稲の生育には低温である北海道の自然環境下でも旺盛に茎数を増加させられる性質をもつこと、②苗の数を節約できる疎植栽培（苗の植え付け間隔が広い栽培方法）でも十分な茎数（穂数）を確保しやすい性質をもつこと、を意味します。

栽培の低コスト化につながる直播栽培（種子を水田に直接播く栽培方法）では、播かれた種子の間隔や芽の出方は一定ではなく、苗が密集した場所や、苗がまばらな場所が生じます。このような場面でも、1本1本の苗の間隔に応じて、イネ自身が茎の発生数を調整するという能力は、収量の向上・安定化に効果を発揮する可能性があります。

北海道稲作の歴史を振り返ると、栽培されてきた品種は、稲の伝来から本州を経て北海道にもたらされた品種や、それらの品種を基に数々の交配を行って改良してきた品種が大半で、熱帯産の野生イネを育種の材料として利用して成功した例はありませんでした。今回開発した系統は、北海道の環境で有用な特性のみを熱帯産野生イネから北海道のイネに取り込んだものであり、北海道稲作の収量安定化や栽培の低コスト化に役立つと期待されます。

5. 発表雑誌

なし

6. 注意事項

特になし

7. 問合せ先：

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター
寒地作物研究領域

清水 博之

〒062-8555 北海道札幌市豊平区羊ヶ丘1番地

TEL：011-857-9311

8. 用語解説：

野生イネ：現在一般に栽培されている栽培イネの祖先。熱帯を中心に広く自生しており、日本には自生しません。栽培イネにはない有用な遺伝子を持つものも多く、近年、栽培イネを改良するための素材として注目されています。一方、現在では世界各地で野生イネの絶滅が危惧されていて、その保全が叫ばれてい

ます。

発育可塑性：環境の差を察知して、自律的に、最もその環境を有効利用するように生長の仕方を変える生物の能力のことです。生物の環境への適応性に関わる性質です。野生種から栽培種に変化する栽培化の過程において、この性質は徐々に失われてきたと言われています。

9. 添付資料：

なし（記者発表当日に配布します）

1. 発表タイトル：

「資源作物エリアンサス (*Erianthus arundinaceus*) のバイオマス原料の生産増大に向けた育種戦略」

2. 発表者：

上床修弘¹・寺島義文²・小林 真³・安藤象太郎²・杉本 明²・我有 満¹

(1. 農研機構・九州沖縄農業研究センター、2. 国際農林水産業研究センター、
3. 農研機構・畜産草地研究所)

3. 発表概要：

再生可能エネルギーの1つとしてバイオマスエネルギーがあります。バイオマスを利用してエネルギーを生産するときに重要になることの1つは、原料を安定的に確保することです¹⁾。食料生産と競合しない土地利用を特徴とするエリアンサス (*E. arundinaceus*) やススキ類は、バイオマスの生産力が高く、計画的に栽培することにより安定的にバイオマス原料を調達できるバイオマス資源作物として注目されています。しかし、日本国内では、エネルギー利用を目的としてバイオマス資源作物が利用される場面はなく、実用品種も開発されていませんでした。そこで、発表者らは、バイオマス生産が旺盛な多年生イネ科植物のエリアンサスに着目し、世界的にも初めてとなるバイオマス原料生産を目的としたエリアンサス品種候補系統を開発しました。バイオマスエネルギー事業に必要な原料を安定的に確保する場面で、本品種候補が原料生産に活用されることが期待されます。今後、エタノール生産や熱利用等の利用法に対応した品種開発が想定されますが、何れの場合においても、収量性および機械収穫適性の向上によって原料生産の低コスト化を達成することが重要になると考えられます。

4. 発表内容：

エリアンサスはバイオマス生産性が高いだけでなく、食用作物の生産が困難な生産環境の厳しい農用地での栽培や粗放的・多年的に栽培が可能である点で、低コストにバイオマス原料を生産できる資源作物です。熱帯起源のエリアンサスは生産力が高いですが、従来の系統の草型は茎が横に広がる散開型で、機械収穫に問題がありました。そのため、高い生産力を維持しながら、茎が横に広がるタイプから茎が立つタイプに草型を改良することで、機械収穫の効率を向上させることが重要な育種目標でした。

エリアンサスの遺伝資源の中から茎が直立している系統を母材として、国際農林水産業研究センター (JIRCAS) 熱帯・島嶼研究拠点 (沖縄県石垣市) におい

て自殖後代集団を養成しました。この自殖後代集団から機械収穫に適した直立型の草姿であり、雑草化対策に配慮した晩生²⁾で生育旺盛な1株を選定し、これを親株とした自殖種子を採種しました。この種子をエリアンサスの品種候補系統とし、農研機構・九州沖縄農業研究センター（熊本県合志市）、農研機構・畜産草地研究所（栃木県那須塩原市）および JIRCAS（沖縄県石垣市）の3場所で収量および特性を調査しました。品種候補の2年目乾物収量は、32t/ha（石垣）、35t/ha（合志）、14t/ha（那須）であり、各試験地で旺盛なバイオマス生産力を示しました。さらに、直立型への改良により大型の飼料用収穫機を用いた効率的な収穫が可能となりました。

エリアンサスの最初の品種候補の開発は、品質が保証された種苗を安定供給することが第一義的な目的でした。今後、化石資源代替のための様々な利用目的が想定されます。液体燃料、燃焼ペレット・チップ等での熱利用、建材や培地資材としての利用、飼料、発電等の具体的な提案に対し、高いバイオマス生産性と生産コスト低減を担保しながら用途に合わせた品種を開発する必要があります。現在、これらに対応するため現有の遺伝資源から純系育種や交雑育種³⁾を行い、系統育成を進めています。

本講演の研究は、農林水産省委託プロジェクト研究「農山漁村におけるバイオ燃料等生産基地創造のための技術開発」、「地域活性化のためのバイオマス利用技術の開発」の支援のもとで実施しました。

5. 発表雑誌：

なし

6. 注意事項：

特になし

7. 問合せ先：

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構 九州沖縄農業研究センター
研究担当者 畜産草地研究領域 上床修弘・我有満

TEL/FAX: 096-242-7755

8. 用語解説：

¹⁾ 原料の安定的な確保：作物を計画的に栽培して原料を生産するため、廃棄物や未利用資源からの原料より安定的な供給が可能となる。

²⁾ 雑草化対策に配慮した晩生：栽培地で結実しにくい晩生個体を用いることで雑草化を防ぐ。

- ³⁾ 純系育種、交雑育種：自殖で得た後代（純系育種）や他個体との交雑から得た後代（交雑育種）から育種目標と合致した形質を持つ個体を選抜して品種開発を行う従来からの育種方法。

9. 添付資料：

なし（記者発表当日に配布します）